



いけにえの毒蛇

今から400年位前の、天正のころのある日のことでした。

6月の陽ざしは強く、から梅雨の日照りが3、4日つづいた東海道は、すこしの風でも砂ほこりがまいあがっていました。

白い手甲ときゃはんをつけ、わらじばきの7人づれの巫女たちが、いかにも楽しそうに笑いあって、むし暑い東海道を西へ向って歩いていきました。

この巫女は、下総の国（千葉県）から修業のために京都へ行く途中でした。

「ここでひと休みしましょう。」と通りかかった毘沙門天前の茶屋のえん台に、腰をおろしほっとひと息いれました。

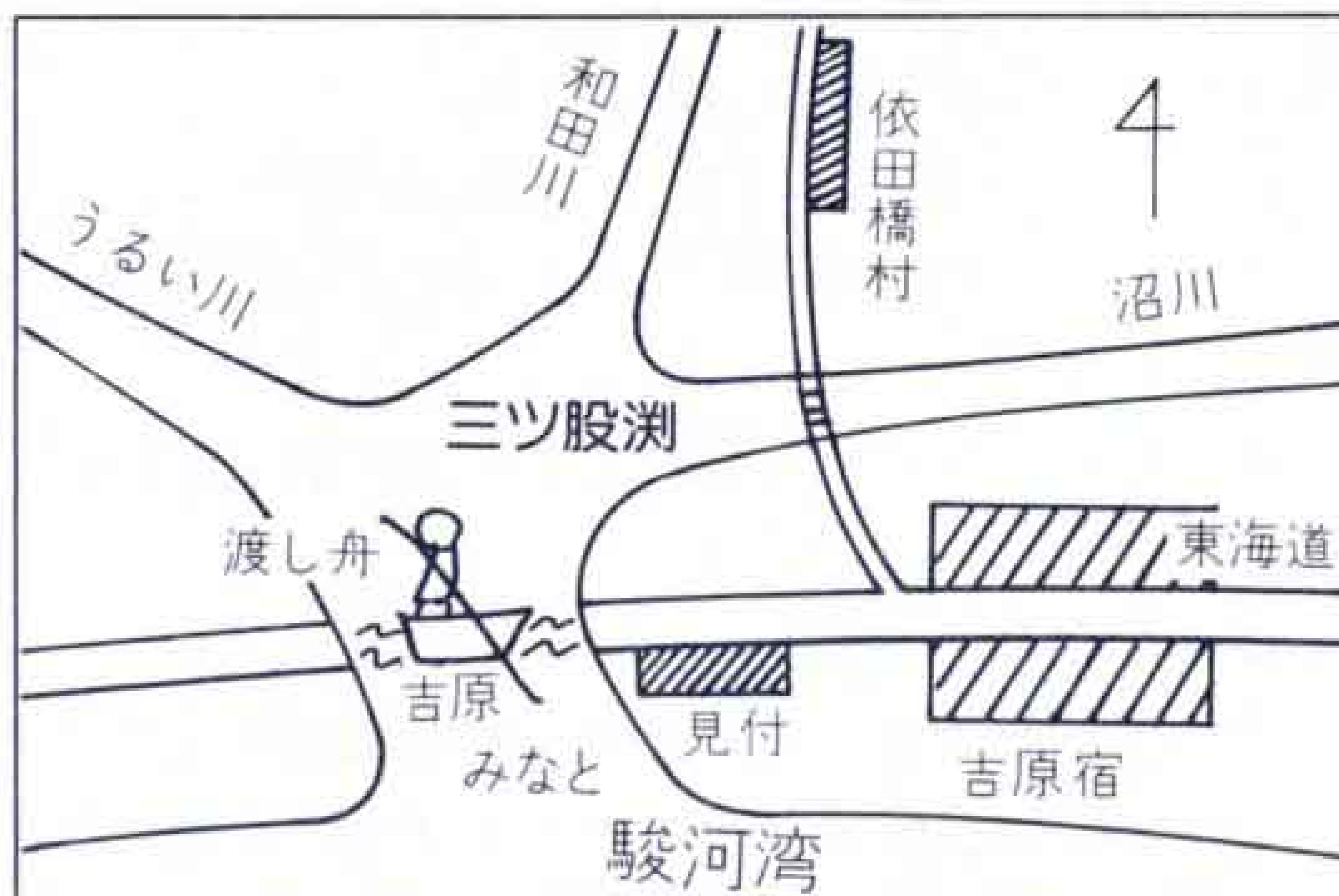
ところが、なんとなくあたりがざわめいています。

巫女たちは茶屋のおかみさんに、「この吉原宿で何かあるのですか。」と聞いてみました。

三ツ股淵に大蛇が

するとおかみさんは、いかにも待っていましたというような顔つきで話しました。

「この北側の三ツ股淵には何年も前から大蛇が住んでいて、毎年6月28日の大祭日に村人は、小舟につんだ三俵分のお赤飯を淵のまん中に沈めて、大蛇の怒りを静める行事をや



【天正のころの東海道と三ツ股淵付近】

ります。

ところが、12年に1度の巳の年には、若い娘をいけにえにすることになっていて、もしそれをやらないと、大蛇は怒ってこの土地に大難を与えるというのです。

そこで、いけにえになる娘をくじ引きで決めているのです。」

その話しをきいた7人の巫女の顔色がさっと青ざめました。

いっそのこと沼津宿まで引きかえして、根方街道から京都へ行こうかと迷っていると、突然入ってきた宿場役人に問屋場の前まで連れていかれ、無理にくじを引かされました。

「神様！どうか当たりませぬように……」と心に思いながらひとりひとり、くじを引きました。

ところが、7人目に引いた一番年下の、おあじという巫女のくじには、赤い丸がついていました。おあじを囲んで7人はその場にどっと泣きふしてしまいました。

（6月5日発行の広報ふじにつづく）



【現在の和田川と沼川の合流点】

応急手当の知恵



さあ大へん!!
でも大丈夫

毒虫にさされた

ハチ、ブヨ、アブなどに刺されたときは、痛みやはれが起きます。

また、かゆくともかいたりしないようにしましょう。

- ・きずの中に針が残っていれば、毛抜きでぬきとり、アンモニア水をぬります。
- ・はれてきたら冷湿布をします。

かぶれ

うるしなどにかぶれたときは、油をぬるとかえって刺激することになり、かゆくなくなります。

かいてきずがつき、そこから悪化することが多いので注意しましょう。

- ・濃い石けん水をつくり、5~6回洗います。きれいな水で洗い流します。

